

ワークショップ報告
「非民主主義体制における社会的亀裂の統制—中東・北アフリカと旧ソ連の比較研究」

【日時】 2017年1月28日（土） 14:00-18:00

【場所】 上智大学四谷キャンパス 10号館3階 10-301室

【プログラム】

14:00 趣旨説明、報告者・コメンテーター紹介

14:15 報告①白谷望「モロッコにおけるベルベル民族運動の展開と政治体制の安定」

14:40 報告②渡邊駿「亀裂の上に立つヨルダン・ハーシム王制：社会的統制と政党政治への道のり」

15:05 休憩

15:15 報告③松寄英也「クリミアのサブ・ナショナルな民族的亀裂の統制：自治共和国の再創設を巡って」

15:40 報告④立花優「体制転換と社会的亀裂の統制の失敗：アゼルバイジャン」

16:05 休憩

16:20 コメント・質疑応答（岡奈津子先生・山尾大先生）

17:00 全体討論

17:45 終了の挨拶

18:00 終了

本ワークショップは、非民主主義体制を採用し、かつ民族や言語、宗教などの亀裂を抱える分断社会において、政府はどのように国内の社会的亀裂を統制しているのか、その統制方法や成立の条件を政治学的に検討することを目的として開催された。

民族紛争や内戦の管理は、現代の国際社会における主要な問題領域となっている。冷戦終結後に多発した民族、宗教を巡る集団間の対立から現代のイラク戦争、リビア内戦、ウクライナ危機まで、如何にしてこれらの紛争を管理するのかという問題は、政治学者の関心を集めてきた。

こうした中で実践されてきたのが、権力分有（パワーシェアリング）である。権力分有とは、「民族、言語、領域などの社会的亀裂の存在している社会において、集団間の権力を共有することで、紛争管理を試みる制度」とされている。比較政治学では、その類型として、多極共存型民主主義や統合アプローチ、統制モデルなどが提唱されてきた。その中で、レイプハルト（Lijphart 2004）は、多極共存型民主主義を提唱した。彼は大連合、相互拒否権、比例代表制、自治などを成立の条件に挙げ、多極共存モデルを採用すると、分断社会でも民主主義を保持できると論じた。

しかし、多極共存型民主主義を採用しない全ての国が武力紛争に悩まされているわけではない。非民主主義体制では、多極共存型民主主義とは異なる方法で社会的亀裂を管理している。中東と旧ソ連諸国は、非民主主義体制を採用する国が多く、かつ民族や国民形成

の問題を抱えている点で類似している。そのため、多極共存型とは異なる論理や機能が働き、国内政府が社会的亀裂を統制することによって、集団間の対立を抑制していると考えられる。現に、中東をフィールドとするルスティック (Lustick 1979) は、非民主主義体制における社会的亀裂の統制を「優位に立つ集団が他の集団の政治行動や機会を抑制することによって、安定を達成すること」と定義して「統制モデル」を提唱し、その知見はコメンテーターとしてご参加頂いた岡先生によって旧ソ連のカザフスタンにも援用されてきた (岡 2006)。とはいえ、その方法や戦略、条件など、包括的な比較研究がなされているわけではない。これらを論じることは、アラブ政変を初めとする武力紛争や内戦を如何に安定化させていくのかを考える上でも重要であろう。

本ワークショップの目的は、中東・北アフリカと旧ソ連の事例分析を通じて、非民主主義体制における社会的亀裂の統制について考察することとした。前述した問題をより一般化すると、「非民主主義体制を採用する国において、政府はどのように民族や宗教などの社会的亀裂を統制しているのか」、または「如何なる条件が揃えば、政府は社会的亀裂を安定的に統制できるのか」となる。こうした問題に対し、本企画ではモロッコ、ヨルダン、クリミア、アゼルバイジャンを事例として個別報告を行った。

まず白谷報告では、モロッコにおける国王の政策としてのベルベル民族の積極的な取り込みが論じられた。ヨルダンの事例を扱った渡邊報告では、トランス・ヨルダン系住民とパレスチナ系住民という亀裂に対して、多元主義に基づく統合政策とトランス・ヨルダン系優位の社会統制という二重の戦略がとられていることが明らかにされた。松寄報告では、ソ連末期のクリミアにおいて、如何にして政治的安定が保たれたのかという問いのもと、過激派の排除と穏健派の取り込みによって民族的要求が制御されたことが論じられた。最後の立花報告では、アゼルバイジャンではアルメニア人集団内の差異が統制に利用され、外部の影響によって統制が動揺・崩壊したことが明らかにされた。

その後の質疑応答では、まずコメンテーターの岡奈津子先生 (アジア経済研究所) より、4 か国の歴史・社会経済的背景の多様性が指摘され、分析対象とした時期や期間に対して、より慎重な選択が必要という意見が上がった。次いで、山尾大先生 (九州大学) は、各事例の整理を通じて、4 か国を比較する視点が提示された。例えば、①統制の対象となっているのは少数派か否か (少数派の事例は、モロッコのベルベル人、クリミアのクリミア・タタール人、アゼルバイジャンのアルメニア人。多数派の事例は、ヨルダンのパレスチナ系住民)、②政治体制にとって亀裂が深刻な脅威になっているか (脅威となっていない事例はモロッコのみ)、③外部アクターの存在の有無 (外部アクターの介入がない事例はモロッコ) などである。また、全体討論では、今後の研究の方向性として、比較の可能性に関する様々なコメントが上がった。

今回のワークショップを通して、地域を超えた比較研究の難しさを改めて痛感したものの、全体討論で頂いた貴重なコメントを踏まえて比較分析の枠組みなどを練り直し、今後同様のテーマで共同研究を進めていけたらと思う。